傭兵団へようこそ

築

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
傭兵団へようこそ

【Ｎコード】
Ｎ２８５７Ｚ

【作者名】
築

【あらすじ】
小学一年生の少女、神代月子（かみしろつきこ）はその日いつも通りに家を出た。しかし、登校途中に寄り道した川で溺れ、彼女は異世界に流される。そして流れ着いた異界、月子はとある傭兵団に拾われ、彼らの一員として乱世を生き抜いていく。※処女作ですので至らない部分がありましたらご指摘いただけると嬉しいです。

序「月子という少女」（前書き）

序章になります。多少きつい表現ありです。

序「月子という少女」

「いってきまーす。」
今日も彼女、神代月子（かみしろつきこ）はそう母に告げて玄関のドアを開けた。

時計の針は七時を指している。登校にはまだ早いこの時間に家を出るのが彼女の常であった。そうして家から小学校まで15分の道程をたっぷり道草して、登校時刻ぎりぎりに学校に着くのがこの少女の一日の始まりである。もっとも昨日は道草が過ぎて朝のホームルームに遅刻してしまったのだが。せっかく近所の小川にカエルの卵が産み付けられているのを見つけたのだから夢中になっても仕方ない、というのが月子の言い分だった。新任の担当教諭からは大目玉である。

そもそも、と月子は思う。学校は退屈すぎるのだ。外にはいろいろと面白いものがあるのに学校で机に張り付いてお勉強、なんてもったいない。足し算や引き算よりも、カエルの卵のほうがよっぽど面白いのに。

しかし世間一般では、小学生にはおとなしく席に着いて先生のお話を聞くことが求められているらしい。それが出来ない月子は劣等生、というわけだ。そんな『できない子』である月子をなんとかしなければ！と担任は燃えているらしく家に電話が掛かってきたのも一度や二度ではない。

「…ガッコウ、いやだな。」

小石を足でドリブルしながらぽつりと呟いてみる。
クラスメイトは月子のことを先生に逆らうヘンな子という目で見ているし、元々あまりおしゃべりでは無い月子には小学校に入っ

てもう三ヶ月だというのに友達がいなかった。なので学校では先生の睨み付けるような視線を一人で耐えなければならない。
頭の中をぐるぐると嫌な気持ちが渦巻いている。月子はぶんぶんと頭を振ってそれを振り払った。
気を取り直して、今朝の目的はカエルの卵である。昨日は用意が無かったので持って帰れなかったが、今日はちゃんとプラスチック製の水槽を持ってきていた。嫌なことは忘れて意気揚々と、昨日卵をみつけた場所に向かう。

「わっ…、生まれてる。」

小川の中の流れの淀んだ場所。昨日カエルの卵を見つけたところを覗き込むと小さなオタマジャクシが群れをなしてちょろちょろと泳いでいた。月子は思わず瞳を輝かせる。
今日の獲物は変更。泳ぎ回っているので卵より難しいだろうが、沢山いるから川に入れば手でもすくえそうである。幸い今日はサンダルだからそのまま川に入れる。月子は川辺にランドセルを放り出して、オタマジャクシを驚かさないようにそっと水面に足を着けた。アスファルトで熱された足に冷たい川の水が心地良い。足の指でグーパーを作って川底のむにゅむにゅした感触をしばし楽しんでから、月子は標的に取り掛かった。

「うむ、たいりょう…」

小さな立方体（すいそう）の中、オタマジャクシの群れが少なくなった酸素を求めてうぞうぞと泳いでいる。都会の集合住宅もびっくりの超過密状態だ。うぞうぞとうごめく黒い水槽を覗き込んで一人恍惚の笑みを浮かべる幼女。月子である。端から見ると心配になる情景が出来上がっていた。んふふふふふ、と怪しい笑いを湛えつつ、戦利品をもっとよく見てやろうと水槽を光にかざすように高く持ち上げる。

その時である。

「ひゃっ！」

――川底の石に足を取られた。

空中に投げ出される水槽。

太陽。

青い空が見えて。

体が水面に強く叩きつけられるのを感じた。

衝撃で底に溜まっていた泥が舞い上げられる。

鼻孔に、驚いたままの形に開いた口にも容赦なく水が浸入してくる。

肺が、脳が空気を求めている。

巻き上げられた泥が煙幕となり月子の視界を阻んで、上下の感覚をも失わせている。

月子の足が着くほど、浅い川の筈なのに、もがいても、もがいても、川面に届かない。

―ふと、学校に行かなきゃ、と場違いなことを思い出した。

そういえば今何時だっけ、と思って。

「神代さん、あなたは落ち着きがなさすぎます。」と先生のお決まりの叱り文句が思い浮かんだ。

それからお父さんの月子を撫でる大きな手を。

最後に毎朝聞いているお母さんの「いってらっしゃい」を思い出して。

――月子は最期の意識を、手放した。

川で溺れた児童の捜索は町を挙げて行われた。しかし程なくして2？下流で児童の履いていたサンダルの片方が見つかり、生存は絶望的と判断された。警察と消防による捜索が打ち切られた後も、しばらくは下流の町の駅前でチラシを配る両親の姿が見られたが、一年経ち、二年が過ぎた頃にはそれも無くなった。

享年七歳。

それが神代月子についての、この世界での最後の記録である。

一話「グレイグ傭兵騎士団」

大陸を横断する霧吹連山以南に広がる大扇状地帯。その中央、西をイスカーン帝国、東をヴァルトリア神国という二国に挟まれた地に、ここイルミナ王国は位置している。その東の国境沿い、即ちイルミナと隣国ヴァルトリアを隔てる大河カムーン川のほとりに、彼らグレイグ傭兵騎士団は野営地を設営していた。

現在イルミナとヴァルトリアは小規模な小競り合いが続く紛争状態となっている。南北に長い国境線の守備は王国正規兵だけでは手が足らず、優先度の低い拠点防衛に彼らのような体よく使える傭兵団が駆り出されているというわけである。

「とは言え、なぁ。」

川縁に腰掛け安い紙巻煙草をふかしながら、団長ブラン・グレイグは薄く朝もや掛かった対岸をぼんやりと見遣った。

手が足らないのはあちらも同じ。そしてこういった拠点に傭兵が宛がわれるのもまた同様である。こちらもあちらも金のため、使命感も名誉欲も無しと来ると必然的に戦闘行為が行われないという状況となる。

その結果、戦争中にも関わらず両軍の間にはなんとも言えないのほほんと気の抜けた空気が漂っていた。半日ほど北上したカムーン大橋の辺りでは両国本隊同士による一触即発のある睨み合いが続いているらしいが、今のところこちらに飛び火してくる気配は無さそうだ。

「団長、お早う御座います。良い朝ですねぇ。」

「…イールか。おはようさん。あと気配を殺して近づくのは止め

ろな。」

突然背後に現れた目の細い青年に嘆息しつつ目をやると、細い眼を更に細くして笑みを返してくる。

「嗚呼なんと嘆かわしい。天下のブラン・グレイグともあろうお方が私如（ワタクシ）きの気配に気づかないとは。団長ももうお年なのですかねぇ。」

「バカいえ。俺はまだ四十にもなってねぇぞ。老け込むにゃ早ぇよ。それにな、この温い戦況と来たもんだ。俺じゃなくったって気が抜けらぁ。」

「うふふ、冗談ですよ。仮に私が殺気を出して近寄れば貴方は仮令就寝中でも気が付かれるでしょうからねぇ。」

「冗談じゃねぇぞ。目が覚めたら手前ぇのツラなんてのは勘弁被るぜ。」

嫌そうに会話を打ち切って再び青年―イールを見る。顔には薄い笑みが貼りついたままだ。何がそんなに嬉しいのかと思うが、生憎彼は大抵常にこんな表情である。

イールゾァ・キルヒシュタン、通称イール。王立魔術院を追い出され傭兵稼業に身をやつす不良魔術師にしてグレイグ傭兵団の主砲でもある。

「へぇ、気が合いますねえ。私も髭面の強面中年男性と御同床する趣味は無いのですよ。」

「…なんの話だ。ん、おいゾッドが来たな。飯の時間だ。」

「おやぁ、本当だ。彼はこの距離からでもよく分かりますねぇ。」

集会所兼食堂のテントから筋骨隆々の巨漢がこちらに歩いているのが見える。フルネームでゾッド、かつて西隣の帝国と戦争があった折にブランの傭兵団に加わった元剣闘士奴隷である。長身のブランと比しても更に頭一つ分は高く、横幅も二周りは大きい。その姿はまるで歩く巖のようであり、成程、遠くからでも一目で判別できる。

「…団長、カムリが、呼んでる。…飯だ。」

近くまで来たゾッドが訥々と、見た目に依らず優しい声色で告げる。その声色通りに普段は心優しい彼だが、戦闘に於いてはその外見のままに鬼神の如き働きを見せる。

ブランはかなり短くなってしまっていた煙草を親指でもみ消すと、一息入れて立ち上がった。イール、ゾッドというむさい取り合わせでのろくさと食卓の待つテントに向かう。

「おい、今日の担当はカムリか？まさかあいつ一人に任せたわけじゃぁねぇよな。」

「…大丈夫だ。おれも、手伝った。味付けは、おれだし、…変なものも、入って、ない。」

「お前が監督したなら問題ねぇか。もう得体の知れない薬草やら隠れてない隠し味やらは御免だからな。」

「彼女の可憐な手からは世にもおぞましい劇物が生み出されますからねぇ。彼女の神も料理について啓示を下さる事は無いのですねぇ。んっふふ。」

本人の居ないところで散々言われている少女、カムリ・イミナ・リエッタはイルミナ国教で祀られる十二神の一、賢羊のメイサーラに仕える巫女である。彼の宗教の教えに、『他者に奉仕せよ』というものがあり、神に仕える者は一定期間を神殿で修行した後に巷間に出て、衆生に奉仕する義務がある。出仕先は学校、商店、治療院など多岐に渡るが、軍隊も選択肢の一つではある。

王国正規軍はもちろん、王国内を拠点とするのであれば傭兵団に出仕することも出来る。しかし、汚れ仕事が多い軍隊は人気の無い出仕先だった。移動が多く、悪党紛いの団員が居ることも儘ある傭兵団では尚更だ。それでも規模の大きい傭兵団では一人二人は抱えていたりするが、ここのような二十人弱の小所帯に好き好んで出仕するのはかなり珍しい。変人と言って良いだろう。

ともあれそれがグレイグ傭兵団の従軍神使、カムリである。平時は女手の少ない団内の雑事担当、戦時には神の力を借りた癒しの業で団員の治療に当たってくれる。料理以外では非の打ち所が無い人材と言えるだろう。料理以外では。

「おや、噂をすればですねぇ。」

なかなか来ない三人に痺れを切らしたのか、白い装束を纏った少女が栗色の巻き毛を跳ねさせつつテントから出て彼らを出迎えた。

「なんの話ですか？それよりっ、早く来ないと私とゾッドさんの作った美味しい料理が冷めちゃいますよぅ。」

「御機嫌ようカムリ嬢。耳が良いのですねぇ。なに、他愛ない噂話ですよ。」

「ああ、他愛ない劇薬の噂話だな。それと作ったのは主にゾッドだろうが。」

「んむー。ブランさんは意地悪です。わたしだってちゃんと手伝ったんですからねっ。盛り付けとか配膳とか食材を洗ったりとか。ね、ゾッドさん。」

「…ああ、カムリは、がんばった。えらい、ぞ。」

「えへー。あっ、ホラホラさっさと入って席に着かないとアウレリアさんがご立腹ですよぉ。」

「なにっ、そいつはまずいぞ。あいつは俺でも怖いからな。」

半分本気の軽口を叩きつつ、風防を捲くり団員達の待つテントに入る。団長ブラン・グレイグ以下総勢十七人、このさほど大きいとは言えないテントに収まってしまう人数のそれが、少数精鋭を詠うグレイグ傭兵騎士団のメンバーである。ブランは居並ぶ面々を満足そうに見渡す。誰もが気心の知れた彼の頼れる仲間にして養っていくべき家族だった。

「おはよう、野郎ども。遅れて悪ぃな。っと、んん?」

「おはようグレイグ。遅刻を反省しているのなら毎日繰り返さないようにしなさい。団長がそんなことでは隊規に関わります。さらに、この場には女性も在席しているので野郎どもという挨拶は不適切です。それと、どうかしましたか。怪訝そうな顔をしていますが。

」

「いや、よく見たらキリの野郎がいねえじゃねえか。俺を勘定に入れて十六人しかいねえぞ。」

「わざわざ報告せずとも承知しています。彼なら対岸の偵察任務に就いて貰っています。こうして我々が食事を取っている時に敵方が攻めてくることもあるのですよ。」

ハァ、と小さく息をつく銀髪の麗人。グレイグ傭兵騎士団副長、氷の副長の異名をとるアウレリア・ディ・シュヴァルツシルトである。ブランとは傭兵団立ち上げ以前からの長い付き合いになる。

事務仕事が壊滅的な団長に代わって、経理、物品管理、外部との折衝、戦時の参謀など多岐に渡る業務をこなしている。団の屋台骨を支えているのはこの人である、とは団員全員の意見の合致が見られるところであった。ちなみに団長はどっしり構えてんのが仕事なんだ、とは彼自身の談。

「おお、そうかご苦労だな。つーとあいつの分の飯も取っておいてやんねぇとな。いや、いつもすまねぇなアウラ。」

「皆の前では家名或いは職名で呼びなさい、とこれも毎日言っていますね？グレイグ。それと名前を省略しないこと。」

「んだよ、お前の名前は舌噛みそうになんだよ。なっ、カムリちょっと言ってみろよ。」

とりあえず横で聞いているカムリに話を振ってみるブラン。他の連中はいつもの事と、トップ二人のやり取りを無視して既に朝餉にありついていた。

「えあっ。ななんでわたしに振るんですか。え、えーとアウレリャ・ディ・しゅぶっ。…。」

団長の急な無茶振りに応え、期待通りの結果を生み出すカムリであった。神の僕は従順たれ、という教えを忠実に守っていると言えよう。隣に座っていたゾッドがお前は良く頑張ったとでもいう様にカムリの肩を叩いている。

「リエッタ、その命令には応えなくて良いのですよ。グレイグ、貴方は緊張感が無さ過ぎます。未だ実際に矛を交えてはいないとは言え我々は名目上交戦状態なのですから。敵方には船の用意もあります。油断は禁物ですよ。」

「つってもよぉ、敵さんも俺らと同じ雇われだぜ。わざわざ危険を冒してえっちらおっちら船漕いでくるとは思えんがねぇ。」

「…確かに。我々は、防衛。有利だ。」

ブランの意見にゾッドも賛成の意を表す。

「…まあその、確かにその通りではあるのですが。」

常ならばアウレリア側に回ることが多いゾッドが、今回はブランに賛同したためにアウレリアも珍しく言い淀んだ。団員中最も真面目な部類に入る二人でもそうならざるを得ないほど、今回の戦場が日和ったものであるという事だろう。

「しかしですねグレイグ。団長という役職にはたとえ平時であっても職務があるものなのですよ。今日はせめて帳簿の読み方程度は

覚えて貰います。」

「うげ、勘弁してくれよ。俺はお前さんと違って学がねぇから無理だっつーに。」

「いーえ。貴方なら出来ます。貴方はやらないだけです。さぁこちらへ。」

その時である。ぱんぱん、と掌を打つ音が聞こえ、団長、副長のやり取りを生暖かく見守っていた団員達の目がそちらに向かう。音の主はイールだ。

「んふ。御両名ともそろそろ止めておいた方が宜しいのじゃありませんか？御二人の夫婦漫才で、緩んだ空気が更に緩みきっちゃってますからねぇ。ふふふ、いえ私にとってはあなた方の仲睦まじい様子を眺めるのも一興では有るのですけれどもねぇ。」

イールの言にアウレリアの白い肌がみるみる朱に染まっていく。

「ばっ、なっなにをいっているのですかあなたはキルヒシュタン！わっ、私とブランがそそそそんな！めおとっ、めおっ。」

「おんやぁ、どうかされましたか？口調が崩れておいでですよ副長閣下。」

「うふふふふ、まあそんな事よりも、今日々の退屈を如何様に解消すべきでしょうかねぇ。ねぇ皆さん。例えば偵察に出たキリさんが何か途轍も無く面白い厄介ごとを発見して帰って来るとか、ねぇ。」

それきり黙って、テントの入り口をじっと眇めるイール。この魔術師の奇妙な言動は今に始まったことでは無いが、その魔術師としての実力を知っているだけに、団員達も思わずそちらを注視してしまう。

しばしの沈黙。その静寂を破ったのは無理矢理作った笑みを浮かべたカムリだった。

「…も、もうやだなぁイールさんってば。縁起でもないこと言わないでくださいよぉ。ねっ、ブランさん。」

「おーいアウラー。もどってこーい。…ん？おおそうだな。不吉なこと言うもんじゃねぇぞイール。平和が一番！ってな。だろう野郎ども。」

そうおどけて団員達を見返すブラン、片手に持った麦酒のグラスを掲げて乾杯の真似事をしてみせる。その背中に突如、年若い少年の悲鳴に似た声が掛かった。

「――――団長！大変だ！河から女の子が流れてきた！！！」

二話「流れ着いた少女」

「あーあ、退屈だぜ。この任務やるんじゃなかったな。」

そう、独りごちて少年、キリは河面に石を投げ込む。

キリは今年で十二になる。もちろん傭兵団では最年少だ。お陰で誰も彼もがキリを何も出来ないガキ扱いする。だから副長から敵兵の偵察を頼まれたときは嬉しかった。簡単な任務です、と事務的な口調で念を押されはしたが、それでも傭兵になってから初めて任された『らしい』仕事だ。今まで仕事と言えば、カムリの手伝いで汗臭い衣類を洗濯したり、他の団員に混じって炊事当番をしたりと言った裏方仕事ばかりだった。

キリも男だ。せっかく傭兵になったのだから矢面に立つような仕事がしたいと常思っていた。そんなこんなで冒険心を膨らませて受けたこの任務は、その実河川の観察と言い換えてしまっても良いような代物だった。ただでさえカムーン川の河幅は広く、昼間でも対岸は霞んで見える。さらに今朝は川霧が掛かっていて全体の半分も見渡せない。対岸は真っ白で何も見えませんでした、と報告したら副長はどんな顔をするだろうか。案外、事務的な顔で、では川霧の様子を報告なさいとでも言うかもしれない。

はぁ〜、と重く溜息をついて今日何個目かの石を投げ込む。石はチョンチョンチョン、とリズミカルに何度か跳ねて水面に吸い込まれていった。

「んっ？」

石が消えた辺りをよく見ると先ほどより霧が薄くなっているのが分かった。もうしばらくすれば対岸の様子も伺えるようになるかもしれない。これでも目は悪くない。戦術指南のガライ爺にもそう言って褒められた。キリは河岸のぎりぎりに立ち、よく目を凝らして対岸の様子をじっと見つめた。

「うおお！よっしゃだんだん見えてくるぞ。――――人影発見！なんか白いのを抱えてんな…。」

しばらく見つめていると人影は抱えていた白い物体を大きく広げ水平に渡した木の棒にそれを引っ掛けて……。

そこには敵兵がのどかに屋外でシーツを広げる情景が繰り広げられていた。

「うおいっ！なに暢気にシーツ干してんだよ！今日は洗濯物が良く渇くわ～ってか。めでてーなおい！戦争なめてんのか！」

「ちきしょー。これじゃうちといい勝負のだらけっぷりじゃねえか。…ん？なんだありゃ。」

キリが立っている川辺からそう遠くないところに、黒く広がった水草のようなものが漂っている。水面の反射で見にくいがその下には白い布のようなもの。

「――――！あれは、人だ！」

確認するや否や、キリはすぐさま河に飛び込んだ。ただの水死体かも知れないなんて考えもしなかった。

この辺りは土地が平らで河の流れは緩やかだ。真っ直ぐ泳げば追いつける。着衣のまま飛び込んだせいで、衣服が水を吸い体にまとわりつく。春先とはいえ、早朝の河の水は未だ冷たかった。冷たい水がキリの手足から急速に体温を奪って行く。キリは感覚の徐々に失われてきた重い腕で、それでも水を掻き分け進む。そしてやがて、キリの腕が溺れている人物の腕を掴んだ。

思っていたよりも短い時間でたどり着けた。溺れているのが存外小さい人間だったせいで距離の目測を誤っていたのだろう。溺れていたのは女の子だった。それもキリより随分小さい。キリの腕の中でぐったりとしていて顔色も悪いが、伝わってくるわずかな体温がそれが死体ではないことを教えてくれた。

小さい少女を抱えて元の岸までたどり着くのは苦では無かった。岸に上がってからも息つく暇など無い。急いで少女を背中に負ぶった。背中から感じる少女の鼓動は弱々しく、早く処置しなければ命に関わるだろう。キリは集会所のテントへと一目散に駆けた。

〜〜〜

「――――団長！大変だ！河から女の子が流れてきた！！！」

集会所の風防を跳ね除けて、最初にキリの目に入ったのは見慣れた団長の背中で、彼は思わずそう叫んだ。

ブランが飲んでいた麦酒を吹き出しむせるのと、なぜか入り口を向いていた団員達の目が一様に丸くなるのは同時だった。いや、イールを除いて。彼はいつも通りのニヤケ面だ。

刹那の硬直の後、最初に動き出したのは氷の副長、アウレリアだった。

「キリ、任務ご苦労。事情は後で聞きます。その少女をこちらの食卓の上へ。」

ブランは未だむせている。どうやら気管に入ったらしい。
アウレリアは卓上に寝かされた少女を慣れた手つきで触診し、鼓動、脈拍、体温、呼吸を手早く確認した。

「シーシアス、炊事場でお湯の準備を。イバラードは宿舎から出来るだけ清潔な毛布とシーツを。ボレルは備品庫へ。新しい衣服と布を持ってきなさい。皆大至急です。」

呼ばれた三人は各々短く返事をすると、テントから出て行った。

団員達に指示を送ると、今度は少女の人工呼吸に取り掛かる。鼓動はあるとはいえ、まだ幼い少女だ。予断を許さない状況である。なにをおいてもまずは肺の中の水を吐き出させる事が先決だ。弱った鼓動に刺激を与えつつ、少女の口に呼気を吹き込んでいく。少女の弱い肋骨を折らないように力を加減しつつ慎重にこれを繰り返す。アウレリアの白い額には薄く汗が浮かんで来ていた。状況を見つめる団員達の間にも重苦しい空気が流れる。

幾度繰り返した頃だろうか、ピクリともしていなかった少女が大きく体を痙攣させて水を吐き出した。ぜぇぜぇと荒くはあるが、自発的に呼吸している。意識はまだ取り戻さないようだが、一安心といったところか。固唾を飲んで見守っていた周囲の面々も安堵の表情を浮かべている。

「―良かったぁ」

キリは肩の力の抜ける思いだった。半人前の自分でも人の命を救うという大仕事を成し遂げることが出来たと思うと、なんだか誇らしい気分で胸が詰まった。ぽんぽん、と大きな手がキリの頭を優しく叩いた。ゾッドがその優しい褐色の瞳を向けてくる。その目が良く頑張ったな、と言っているようでいつもは子ども扱いと嫌うそんな行為も気にならなかった。

「これでいいでしょう。イバラード、ボレル、戻りましたね。リエッタはその子を着替えさせて、毛布で体を温めてあげなさい。シーシアスが戻ったらお湯で絞った布で体を拭くことも忘れずに。お湯が温くなったら補充しなさい。貴女の治癒の力での治療も並行して行えばすぐ平熱にまで回復するはずです。」

「はっ、はい。がんばります！あ、でもアウレリアさんそれって全部この場所で？」

「…なにか問題でも？」

「あのぅ、だってほら女の子ですし、ここで着替えさせるのはちょっと可哀想かなーなんて…。」

「彼女は気絶しています。それに幼子ですから、男女の別は関係ないでしょう。」

「…ふぁい。」

たとえこの子がいくつであっても、女の子なら見られて恥ずかしいものだとカムリは思うのだが、そう言った機微はアウレリアには伝わらないらしい。

「…いいですね皆さん！ぜえぇぇっったい見ちゃダメですからね！」

カムリは周囲の男性陣をねめつけ、強く念を押した。

さすがに二桁にも達していないような年頃の少女に劣情を催す男性は団員にはいない。カムリの言葉に男性たちは口々に不平を吐くが、それでも素直に少女とカムリから視線を外した。

そこに不意によく通る大声が響く。他の団員と共に成り行きを見守っていたブランだった。

「あ～、どうやら落ち着いたみてぇだな。後の事はカムリに任せるとして、俺たちは俺たちで話し合う必要がある。キリが助けたガキ、そいつは誰か、いったい何処から来たのか、なぜ河に溺れていたのか。奇しくもイールの言葉通り、興味深い厄介ごとってヤツが舞い込んできたみたいだな。」

「…団長、あんたむせてただけの割りにえらそうだな。―ぶえぇっくしょ！」

「混ぜっ返すんじゃねぇよキリ。よく考えたらお前さんもびしょ濡れじゃねえか。てめぇもさっさと着替えて寝ちまえ。風邪引くぞ。」

「おい！おれにだって話し合いに参加する権利はあるだろ！おれが助けたんだぜ…ぇぇぇっくしょん！」

「あーあー言わんこっちゃねぇ。ほら行った行った。」

追い立てられしぶしぶ集会所を出て行くキリ、その背中にブラン

の声が掛かった。

「おいガキ、――よく頑張ったな。誇っていいぜ。」

キリの肩がびくんと跳ねる。表情は伺えないが耳が真っ赤になっているのが見える。

「…ガキじゃねぇっつってんだろおっさん！」

キリはそう捨て台詞を吐いて、集会所から駆け出して行った。

「さぁて、素直じゃねぇガキが行ったところで、会議を始めるとしようか。」

「グレイグ、その前にすべきことがあるでしょう。」

「なんだアウラ、帳簿なら後回しだぜ。」

アウレリアは食卓の片一方を目線で示す。少女を寝かせるスペースを空けるために寄せられた食器類が卓上に乱雑に積まれていた。

「食器の片付けです。さすがにこの状況では会議はできないでしょう。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2857z/

傭兵団へようこそ

2011年12月10日01時58分発行